

猫の草紙

楠山正雄

青空文庫

むかし、むかし、京都きょうとの町まちでねずみがたいそうあばれて、困こま
 ったことがありました。台だいどころ所とだなや戸棚とだなの食たべ物ものを盗ぬすみ出だすどこ
 ろか、戸障子としようじをかじったり、たんすに穴あなをあけて、着物きものをかみ
 さいたり、夜よるも昼ひるも天てんじよう井うらうらやお座敷ざしきの隅すみをかけずりまわつ
 たりして、それはひどいいたずらのしほうだいをしていました。

そこでたまらなくなつて、ある時ときお上かみからおふれが出て、方ほうぼ
 々のうちうの飼かい猫ねこの首くびつたまにつないだ綱つなをといて、放はなしてや
 ること、それをしない者ものは罰ばつをうけることになりました。それま

ではどこでも猫に綱をつけて、うちの中に入れて、かつ節のごは
んを食べさせて、だいじにして飼っておいたのです。それで猫が
自由にかけまわってねずみを取るといふことがありませんでした
から、とうとうねずみがそんな風に、たればからずあばれ出す
ようになったのでした。

けれどもおふれが出て、猫の綱がとけますと、方々の三毛も、
ぶちも、黒も、白も自由になったので、それこそ大喜びで、
都の町中をおもしろ半分かけまわりました。どこへ行って
もそれはおびただしい猫で、世の中はまったく猫の世界になった
ようでした。

こうなると弱つたのはねずみです。きのうまで世の中をわが物

顔のがおにふるまつて、かつて気きままなまねをしていた代かわりに、こ
 んどは一日いちにち暗くらい穴あなの中に引ひつ込こんだまま、ちよいとでも外そとへ顔かおを
 出だすと、もうそこには猫ねこが鋭すい爪つめをといでいました。夜よるもうつか
 り流ながしの下したや、台だい所どころの隅すみに食たべ物ものをあさりに出ると、暗くらやみ
 に目ひかが光ひかつていて、どんな目めにあうか分わからなくなりました。

二

「これではとてもやりきれない。かつえ死じに死しぬほかなくなる。
 今いまのうちはどうかして猫ねこをふせぐ相そう談だんをしなければならぬ。
 というので、ある晩ばんねずみ仲なか間まが残のこらずお寺てらの本ほん堂どうの縁えんの下したに

集まつて、会議を開きました。

その時、中でいちばん年を取ったごま塩ねずみが、一段高い段の上につつ立ち上がって、

「みなさん、じつに情けない世の中になりました。元来猫はあわび貝の中のかつ節飯か汁かけ飯を食べて生きていればいいはずのものであるのに、われわれを取って食べるというのは何事でしょう。このまますてておけば、今にこの世の中にねずみの種は尽きてしまうことになるのです。いったいどうしたらいいでしょう。」

すると元気のよさそうな一ぴきの若いねずみが立ち上がって、「かまわないから、猫の寝ているすきをねらって、いきなりのど

笛ぶえに食くいついてやりましょう。」

と言いいました。

みんなは「さんせいだ。」というような顔かおをしましたが、さてだれ一人進ひどりすすんで猫ねこに向むかっていこうというものはありませんでした。

するとまた一せなかびき背中のまがったねずみがぶしようらしく座すわつたまま、のろのろした声こえで、

「そんなことを言いつても猫ねこにはかなわないうよ。それよりかあきらめて、田舎いなかへ行いって野のねずみになって、気楽きらくに暮くらしたほうがましだ。」

と言いいました。

なるほど田舎へ行つて野ねずみになつて、木の根やきび殻をかじつて暮らすのは氣樂にちがいありませんが、これまでさんざん都でおいしいものを食べて、おもしろい思いをしたあとでは、さてなかなかその決心もつきませんでした。

そこでいちばんおしまいに、中でもふんべつのありそうな頭の白いねずみが立ち上がりました。そして落ちついた調子で、「まあ何かというよりも、もう一度人間に頼んで、猫をつないでもらうことにしたらいいだろう。」

と言いました。

するとみんなが声を合わせて、「そうだ。そうだ。それに限る。」

と言いました。

そこで議長ぎちようのごま塩しおねずみなかまが仲間なかまからえらばれて、ここのお寺てらの和尚おしょうさんの所ところへ行いつて、もう一度どねこ猫つなに綱つなをつけてもらうように頼たのみに行く役やくを引ひき受うけることになりました。ごま塩しおねずみはさつそく本堂ほんどうへ上あがって、和尚おしょうさんのお居間いままでそつとしのんでいって、

「和尚おしょうさま、和尚おしょうさま、お願いねがでございます。」
と言いいました。

和尚おしょうさんはおどろいて、目をさまして、

「おお、だれかと思おもつたらねずみか。その願ねがいというのは何なんだな

」

「はい、和尚さまも御存じのとおり、このごろお上のお言いつ
 けで、都の猫が残らず放し飼いになりましたので、罪のないわた
 くしどもの仲間ななかまで、毎日、毎晩、猫の鋭い爪つまさきにかかつて
 命いのちを落とすものが、どのくらいありますかわかりません。もう一
 日いちにち食たべ物の無ない穴あなの中に引ひつ込こんだまま、おなかをへらして死しぬ
 か、外そとに出て猫ねこに食くわれるか、ほかにどうしようもございません。
 和尚おしょうさま、どうかおじひにもう一度猫どねこをうちの中なかにつなぐよう
 にお上かみへお願い申ねがし上もうげて下あさいまし。今日きょうはそのお願いねがに上あが
 ったのでございます。」

とねずみは言いつて、殊しゆ勝しょうらしく手てを合あわせて、和尚おしょうさん
 をおがみました。

おしょう
和尚さんはしばらく考えていましたが、

「なるほど、そう聞くと気の毒だが、お前の方にもいろいろ悪い
ことがあるよ。まあ、お前たちも人のすてたものや、そこらにこ
ぼれた物を拾って食べていけばいいのだが、これまでのように、
よるひる
夜昼かまわず、人のうちの中をかけまわって盗み食いをしたり、
きもの
着物を食いやぶつたり、さんざん悪いいたずらばかりしておきな
がら、今更猫に苦しめられるといつて泣き言を言いに来ても、
それは自業自得というもので、わたしにだってどうしてもやられ
ないよ。」

こう言われて、ごま塩ねずみもがっかりして、すごすご帰つて
いきました。

もとの縁の下へ帰つて来てみますと、じいさんねずみも、若ねずみも、大ねずみも、小ねずみもみんなさつきのみままで、首を長くして、ひげを立てて、ごま塩ねずみが今帰るか、今帰るか待ちかねていました。けれどもごま塩ねずみがしおしおと、和尚さんに会つてことわられた話をしますと、みんなはいつそうがっかりして、またわいわい、いつまでもまとまらない相談をはじめました。そのうちに夜が明けてしまったので、こんなに大ぜい集まっているところをうっかり猫に見つけられては、それこそたいへんだといって、

「じゃあ、あすの晩もう一度和尚さんの所へみんなで行つて、頼むことにしよう。」

とそれだけきめて、またこそこそとてんでんの穴あなの中に別わかれて
歸かえつていきました。

三

すると猫ねこの方ほうでももうさつそくに、きのうねずみおしようが和尚さんさん
の所ところへ頼たのみに言いったことを聞ききつけて、「これはすてておかれな
い。」というので、町まちはずれの原はらに大おおぜい集あつまって相そう談だんをはじ
めました。

その時ときまず、その中で年としを取とった白しろ猫ねこが一段いちだん高たかい石いしの上上に
立たち上あがって、

「みなさん、聞きくところによりますと、こんどわたしたちが放はなし飼がいになつたについて、ねずみどもがたいそう困こまつて、昨さくばん晩お寺てらの和尚おしょうさんの所ところへ行いつて、もう一度わたくしたちをつないでくれるように頼たのんだということであります。これはじつにけしからん話はなしで、ぜんたいねずみは猫ねこの食くい物ものと大おおむかし昔かみから神かみさまがおきめになつたのです。その上ねずみはあのとおり悪わるさをして、人に間まにめいわくをかける悪わるいやつです。万まんいち一いちねずみめのいうこととが取り上げられて、せつかく自由じゆうになつたわれわれが、またもとの窮きゆうくつ屈みぶんな身み分ぶんに追おい込こまれるようなことがあつてはたいへんです。さつそく和尚おしょうさんの所ところへ行いつて、あくまでそんなことのないようにしてもらわなければなりません。」

こう言うみんなは声をそろえて、

「賛成、賛成。さあ、ではすぐ白のおじいさんに、行つても
らうことにしましょう。」

と言いました。そこで白は一同の代わりになつて、和尚さんの所へ出かけていきました。

「和尚さま、聞きますとゆうべねずみがこちらへ上がつて、わたくしどもの悪口を申したそうですね。どうもけしからん話でございませう。ねずみというやつは、人間の中で申せばどろぼうにあたるやつで、じひをおかけになればなるほどよけい悪いことをいたします。もしねずみの言うことをお取り上げになつて、わたくしどもがまたつながれるようなことになりますと、いよいよ

やつらは図に乗って、どんなひどいいたずらをするかわかりませ
ん。それとは違って、猫はもと天竺の虎の子孫でございますが、
日本は、小さなやさしい国柄ですから、この国に住みつくとい
つしよに、このとおり小さなやさしい獣になったのでございます。
しかし一度ほんとうにおこつて、元の虎の本性に返りますと、
どんな獣でも恐れませぬ。それ故こんどお上からおふれが出て、
放し飼いになったのを幸い、さしあたりねずみどもを手はじめに、
人間にあだをする獣を片つぱしから退治するつもりでいるので
す。

「
と言いました。

和尚さんは猫のこうまんらしく述べ立てる口上を、にこ

にこして聞きながら、

「うん、うん、それはお前の言うとおりでとも。だからねずみの言うことは取り上げずに帰してやったのだから、安心おしなさい。」

と言いました。

そこで猫はすっかりとくいになって、尾をふり立てながら、みんなが首を長くして待っている所へ行つて、

「みなさん、大丈夫、和尚さんは承知してくれました。」
と言いました。

するとみんなは口々に「万歳、万歳。これで安心だ。」
と言つて、手をつなぎ合つて、猫じや猫じやを踊りました。

するとまたこの話を聞いたねずみ仲間では、

「猫のやつが和尚さんの所へ頼みに行つたそうだ。」

「和尚さんは猫に、ねずみの言うことは決して取り上げないと

やくそく
約束をなさつたそうだ。」

「何でも猫は天竺の虎の子孫で、人間のために世界中の悪い獣を退治するんだといばつていたそうだ。」

てんでん、こんなことを口々にわいわい言いながら、またお寺の縁の下で会議を開きました。けれどもべつだん変わったいい知恵も出ません。

「もうこの上和尚さんに頼んでみたところで、とてもむだだから、今夜みんなでそろつて和尚さんの所へ行くことはよそう。」

そして夜の明けないうちに、いよいよ都落ちをして、田舎へ行くことにしよう。」

だれが言い出すともなく、年を取ったねずみたちの間にはこの話がまとまって、みんなはあわてて夜逃げのしたくにかかりました。

するとまた元気のいい若ねずみたちが、くやしがつて、

「まあ待つて下さい。われわれはただの一度も戦争らしい戦争をしないで、むぎむぎ都を敵に明け渡して田舎へ逃げるとい
うのは、いかにもふがない話ではありませんか。それでは命だ
けはぶじに助かつて、この後長く獣仲間の笑われものになつ
て、まんぞくなつきあいもできなくなりません。そんなはずかしい

目にあうよりも、のるか、そるか、ここでいちばん死にもの狂いに猫と戦つて、うまく勝てば、もうこれからは世の中にも何もわいものはない、天井裏だろうが、台所だろうが、壁の隅だろうが、天下はれてわれわれの領分になるし、負けたら潔くまくらを並べて死ぬばかりです。」

と言つて、またくやしそうにきいきい歯ぎしりをしました。

その勢いがあんまり勇ましかつたものですから、逃げ腰になつていた外のねずみたちも、ついうかうかつり込まれて、

「そうだ、それがいい、それがいい。」

「なあに、猫なんかちつともこわくないぞ。」

とこんどは急に力み返りながら、いよいよ戦争のしたくにと

りかかりました。

すると猫ねこの方ほうでもすばやくそれを聞ききつけて、

「何なにを、ねずみのくせに生なま意まい気きなやつだ。」

「よし、残のこらずかかって来こい。一ぺんにみんな食くい殺ころしてやるか
ら。」

と急きゆうに爪つめをとぐやら、牙きばをこするやら、負まけずに戦せん争そうのした
くをして、

「おもしろい。おもしろい。ねずみのやつ、早はやく寄よせて来くればい
い。」

と待まちかまえていました。

四

いよいよしたくができて、勢揃い(せいぞろ)がすむと、ねずみ仲間(なかま)は、
 親(おや)ねずみ、子ねずみ、じじいねずみにばあねずみ、おじさんね
 ずみにおばさんねずみ、お婿(むこ)さんねずみにお嫁(よめ)さんねずみ、孫(まご)、
 ひこ、やしや子ねずみまで何(なん)万(まん)何(なん)千(せん)という仲間(なかま)が残(のこ)らずぞろぞ
 ろ、ぞろぞろ、まつ黒(くろ)になつて、猫(ねこ)の陣取(じんど)つている横(よこ)町(ちよう)の原(はら)
 に向(む)かつて攻(せ)めていききました。
 猫(ねこ)の方も、「そら来(き)た。」というなり、三毛猫(みけねこ)、虎猫(とらねこ)、黒(くろ)ね
 猫(ねこ)、白猫(しろねこ)、ぶち猫(ねこ)、きじ猫(ねこ)、どろぼう猫(ねこ)やのら猫(ねこ)まで、これ
 も一門(いちもん)残(のこ)らず牙(きば)をとぎそろえて向(む)かつていききました。

両方西と東に分かれてにらみ合つて、今にも飛びかかろう、食いかかろうと、すきをねらつているところへ、ひよつこりお寺の和尚さんが、話を聞いて仲裁にやつて来ました。和尚さんは猫の陣とねずみの陣のまん中につつ立つて、両手をひろげて、

「まあ、まあ、待て。」

と言いますと、猛りきつていた猫の軍もねずみの軍も、おとなしくなつて、和尚さんの顔を見ました。

和尚さんはまずねずみの軍に向かつて、

「これ、これ、お前たちがいくら死にももの狂いになつたところで、猫にかなうものではない。一ぴき残らず食い殺されて、この野原

の土つちになつてしまふ。わたしはそれを見るのがかわいそうだ。だからお前まえたちもこれから心こころを入れかえて分ぶん相そう応おうに、人ひとの捨すてた食たべ物ものの残のこりや、俵たわらからこぼれたお米こめや豆まめを拾ひろつて、命いのちをつなぐことにしてはどうだ。そして人のめいわくになるような悪わるいいたずらをきれいにやめれば、わたしは猫ねこにそういつて、もうこれからお前まえたちをとらないようにしてやろう。」

こういうとねずみたちは喜よろこんで、

「もう決けつして悪わるいことはいたしませんから、猫ねこにわたくしどもをとらないようにおつしやつて下くださいまし。」

と言いいました。

「よしよし、その代かわりお前まえたちがまた悪わるさをはじめたら、すぐ

に猫ねこに言いつてとらせるが、いいか。」

と和尚おしょうさんが念ねんを押おしますと、

「ええ、ええ。よろしゅうございますとも。」

と、ねずみたちはきつぱりと答こたえました。

そこで和尚おしょうさんはふり返かえつて、こんどは猫ねこに向むかつて言いいました。

「これ、これ、お前まえたちもせつかくねずみたちがああ言いうものだから、こんどはこれでがまんして、この先さきもうねずみをいじめないようにしておくれ。その代かわりまた、ねずみが悪わるさをはじめたら、いつでも見みつけ次第しだい食い殺ころしてもかまわない。どうだね、それで承しょう知ちしてくれるか。」

「よろしゅうございます。ねずみが悪ささえしなければ、わたくしどもがまんして、あわび貝でかつ節のごはんや汁かけ飯を食べて満足しています。」

こう猫たちが声をそろえて言いますと、和尚さんも満足らしく、にこにこ笑つて、

「さあ、それでやつと安心した。ねずみは猫にはかなわないし、猫はやはり犬にはかなわない。上には上の強いものがあつて、ここでどちらが勝つたところで、それだけでもう世の中に何もかわいものがない。世の中が自由になるものでもない。まあ、お互いに自分の生まれついた身分に満足して、獣は獣同士、鳥は鳥同士、人間は人間同士、仲よく暮らす

ほどいいことはないのだ。そのどろりが分わかったら、さあ、みんなおとなしくお帰かえり、お帰かえり。」

「どうもありがとうございました。これからはもう咎とがのないねずみを取るとことは、やめましょう。」

「そうです。わたくしどもも、けっしてよけいな人ものの物とを取とつたりなんかいたしません。」

猫ねことねずみは口くちぐち々にこう言いって、和尚おしょうさんにおじぎをして、ぞろぞろ帰かえっていきました。

青空文庫情報

底本：「日本の神話と十大昔話」 講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年5月10日第1刷発行

1992（平成4）年4月20日第14刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

猫の草紙

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>